

加茂

禪竹作

前

ワキ 室明神の神職

シテ 里女

ツレ 侍女

後

ワキ 前に同じ

ツレ（天女） 神女

シテ 別雷神

地は 山城

季は 六月

「清き水上尋ねてや。く。加茂の宮居に参らん。

「抑是は播州室の明神に仕へ申す神職の者なり。さても都の加茂と当社室の明神とは御一体にて御座候へども。いまだ参詣申さず候ふ程に。此度思ひ立ち都の加茂へと急ぎ候。

「播磨湯。室の扃の曙に。く。立つ旅衣色染むる。飾磨の徒路行く舟も。上る雲井や久堅の。月の都の山陰の。加茂の宮居に着きにけり。く。

「御手洗や。清き心に澄む水の。加茂の河原に出づるなり。

「直に頼まば人の世も。

「神ぞ糺の道ならん。

「半ゆく空水無月の影更けて。秋程もなき御祓川。

「風も涼しき夕波に。心も澄める水桶の。もちがほならぬ身にしあれど。命の程は千早振。神に歩を運ぶ身の。宮居曇らぬ心かな。

下歌

「頼む誓は此神に。よるべの水を汲まうよ。

上歌

「御手洗の。声も涼しき夏陰や。く。糺の杜の梢

より。初音ふり行く時鳥。なほ過ぎがてに行きや

らで。今一通り村雨の。雲もかげろふ夕づく日。

夏なき水の河隈。汲まずとも陰は疎からじ。く。

ワキ詞

「如何に是なる水汲む女性に尋ね申すべき事の候。

シテ詞

「是は此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり。何処

よりの御参詣にて候ふぞ。

ワキ

「実によく御覧じ候ふ物かな。是は播州室の明神の

神職の者にて候ふが。始めて当社に参りて候。先々

是なる河辺を見れば。新しく壇を築き。白木綿に

白羽の矢を立て。剰へ渴仰の気色見えたり。こは

そも何と申したる事にて候ふぞ。

シテ

「さては室の明神よりの御参詣にて候ふぞや。また

是なる御矢は。当社の御神体とも御神物とも。唯

此御矢の御事なり。あからさまなる御事なりと

も。渴仰申させ給ひ候へ。

ワキ

「実に有難き御事かな。さてく当社の神秘に於て。さまぐ有るべき其内に。

詞

「分きて此矢の御謂。委しく語り給ふべし。

シテ詞

「総じて神の御事を。あざくしくは申さねども。あらく一義を顯はすべし。むかし此加茂の里に。秦の氏女と云ひし人。朝な夕な此河辺に出で、水を汲み神に手向けゝるに。ある時河上より白羽の

矢ひとつ流れ来り。此水桶にとまりしを。取りて

歸り菴の軒に挿す。主思はず懷胎し男子を生めり。此子三歳と申し、時。人々円居して父はと問へば。此矢をさして向ひしに。此矢すなはち鳴雷となり。天に上り神となる。別雷の神是なり。

ツレ

「其母御子も神となりて。加茂三所の神所とかや。

シテ

「左様に申せば憚りの。誠の神秘は愚なる。

シテツレ

「身に弁へは如何にとも。いさ白真弓弥猛の人の。

治めん御代を告げ白羽の。八百万代の末までも。
弓筆に残す心なり。

ワキ 「よくく聞けば有難や。さてく其矢は上る代の。

今末の世にあたらぬ矢までも。御神体なる謂は如
何に。

シテ 「実によく不審し給へども。隔てはあらじ何事も。

ワキ 「心からにて澄むも濁るも。

シテ 「同じ流れのさまぐに。

ワキ 「鴨の河瀬も変はる名の。

シテ 「下は白川。

ワキ 「上は鴨川。

シテ 「又其内にも。

ワキ 「変はる名の。

地 「石川や。瀬見の小河の清ければ。く。月も流れ
を尋ねてぞ。澄むも濁るも同じ江の。浅からぬ心
もて。何疑ひの有るべき。年の矢の。早くも過ぐ

る光陰。惜しみても歸らぬはもとの水。流れはよ
も尽きじ。絶えせぬぞ手向なりける。いざく水
を汲まうよ。く。

ロシギ地

「汲むや心もいさぎよき。鴨の河瀬の水上は。如何
なる所なるらん。

シテ

「何処とか。岩根松が根凌ぎ来る。滝つ流れは白玉
の。音ある水や貴船川。

地

「水も無く見えし大井川。それは紅葉の雨と降る。

シテ

「嵐の底の戸無瀬なる。波も名にや流るらん。

地

「清滝川の水汲まば。高嶺の深雪解けぬべき。

シテ

「朝日待ち居て汲まうよ。

地

「汲まぬ音羽の滝波は。

シテ

「受けて頭の雪とのみ。

地

「戴く桶も。

シテ

「身の上と。

地

「誰も知れ老いらくの。暮るゝも同じ程なさ。今日

の日も夢の現ぞと。うつろふ影は有りながら。濁りなくぞ水むすぶの。神の心汲まうよ。神の御心汲まうよ。

ワキ詞

「実に有難き御事かな。かやうに委しく語り給ふ。御身は如何なる人やらん。

シテ詞

「誰とは今は愚なり。汝知らずや神慮に趣き。迎へ給はゞ君を守りの。此神徳を告げ知らしめんと。顕はれ出でゝ。

地

「恥かしや我姿。恥かしや我姿の。真をあらはさばあさましやな。あさまにやなりなん。よし名ばかりは白真弓の。やごとなき神ぞかしと。木綿四手に立ちまぎれて。神がくれになりにつけりや。神がくれになりにつけり。(中人)

天女

「あら有難の折からやな。我此宮居に地をしめて。法界無縁の衆生をだに。一子とおぼし見そなはす。御祖の神徳仰ぐべしやな。曇らぬ御代を守るなり。

地 「守るべし守るべしやな。君の恵も今此時。

天女 「時至るなり時至る。

地 「感応あらば影向微妙の。相好莊嚴まのあたりに。

有難や。
(天女舞)

地 「賀茂の山並御手洗の影。く。移りうつろふ緑の袖を。水に浸して涼みとる。く。裳裾をうるほす折からに。山河草木動揺して。まのあたりなる別雷の。神体来現し給へり。

後ジテ 「我は是れ。王城を守る君臣の道。別雷の神なり。

地 「或は諸天善神となつて。虚空に飛行し。

シテ 「又は国土を垂跡の方便。

地 「和光同塵結縁の姿。あら有難の御事やな。

シテ 「風雨随時の御空の雲井。

地 「風雨随時の御空の雲井。

シテ 「別雷の雲霧を穿ち。

地 「光り稲妻の稲葉の露にも。

シテ「宿る程だに鳴雷の。

地「雨を起して降りくる足音は。

シテ「ほろく。

地「ほろく。とゞろくと踏みとゞろかす。鳴神の

鼓の時も至れば。五穀成就も国土を守護し。治まる時には此神徳と。威光を顕はしおはしまして。

御祖の神は糺の森に。飛び去りく入らせ給へば。

猶立ち添ふや雲霧を。別雷の。神も天路に攀ぢ上

り。神も天路に攀ぢ上つて。虚空に上らせ給ひけり。